

山梨の文学・略年表

上代	『古事記』『日本書紀』にヤマトタケルと火焼きの翁の問答歌が載る。
中古	『古今和歌集』に甲斐の国和戸の地で歿した在原滋春の最期を伝えるほか、多くの甲斐の歌が収録される。
中世	惠林寺の開基夢窓疎石、甲斐の歌を多く残す。 武田信玄、三条西大納言実澄・四辻中納言季遠らを迎えて、和漢聯句を巻く。 『甲陽軍鑑』成る。
一六〇〇頃	松尾芭蕉、芭蕉庵焼失し、高山樂庵のはからいで谷村(現都留市)に身を寄せる。
一六八二	一瀬調実(市川三郷町生まれ)の句、岸本調和編『俳諧談林一句』に入選。
一六八三	松尾芭蕉、「野ざらし紀行」の旅の帰路、甲州を通る。
一六八五	甲州初の俳書調実編『俳諧白根嶽』成る。
一六八六	俳人の大淀三千風、甲州を訪れる。
一六八七	山口素堂(現北杜市白州町生まれ)、「蓑虫説」を松尾芭蕉へ送る。
一七〇六	荻生徂徠、柳沢吉保の命を受け甲州を訪れ、紀行文「峡中紀行」「風流使者記」を著す。
一七三四	『五色墨』の編者、松木珪琳来甲し、「鏡の裏」刊行。
一七三六	『五色墨』の編者、中川宗瑞来甲し、甲州俳人と連句を巻く(『甲山行』所収)。
一七三七	山口黒露、甲府を出発し駿河・江戸の俳人を訪ねる。以後甲府と駿河を活動の拠点とする。
一七五四	俳人早川石牙ら、江戸の門瑟を甲州に迎えて指導を受ける。
一七八八	若草(現南アルプス市)の俳人五味可都里、『農おとこ』刊行。
一七九〇	初秋、賀茂季鷹、吉田の御師刑部国仲の案内で富士山に登り、「富士日記」を著す。
一七九三	甲府の俳人上矢敵水、松尾芭蕉百回忌に『十蛙』刊行。
一七九五	越前の辻嵐外、可都里を頼って来甲。居住の地とする。
一七九六	この頃甲府学問所創設。
一八〇四	早川漫々、京都・長崎で医学・国学を学んだ後、帰郷。
一八〇五	甲府学問所が大学頭の林衡により徴典館と命名される。
一八〇六	石原夕斐、飛脚を使い諸国俳人の句を集めて『自

一八一四	在草』を編集。
一八一八	松平定能編『甲斐国志』完成する。
一八四三	五味蟹守、可都里を追善する『花の跡』を編集。乙骨耐軒、徴典館初代学頭として友野霞舟とともに甲府に赴任。その道中詠まれた漢詩を『甲役途中詩』としてまとめる。
一八五七	樋口一葉の両親(則義・多喜)江戸に出る。
一八六八	明治維新
(明治元)	甲府県を山梨県と改める。
一八七一	樋口一葉、東京に生まれる。
一八七二	内藤伝右衛門、「峡中新聞」(後の「山梨日日新聞」)創刊。
一八七三	大小切騒動、若尾逸平宅焼きうち。
一八七四	橋田春湖(甲府市生まれ)、政府より社会教化のための俳諧教導職に任ぜられる。
一八七五	師範講習学校(徴典館)を山梨県師範学校と改称。
一八七五	永峯秀樹(北杜市明野町生まれ)がアラビアンナイトの初訳「開巻驚奇 暴夜物語」刊行。
一八七七	甲府一蓮寺で初の県会が開かれる。
一八七九	前田晃、山梨市に生まれる。
一八八〇	篠原春雨、甲府市に生まれる。
一八八二	竹内節編『新体詩歌』刊行(一八八三年九月まで)。
一八八三	三井甲之、甲斐市長塚に生まれる。
一八八四	中村星湖、富士河口湖町に生まれる。
一八八五	石橋湛山、甲府に転居(一歳)。増穂(現富士川町)、鏡中条(現南アルプス市)で幼少期を過ごす。
一八八六	飯田蛇笏、笛吹市境川町に生まれる。
一八八八	秋山秋紅蓼、富士川町鯉沢に生まれる。
一八九〇	俳人、戯作者の萩原乙彦、谷村(現都留市)で歿し清淳寺に葬られる。
一八九〇	池辺三山、「山梨日日新聞」に「新聞記者の地位」掲載。
一八九一	徳永寿美子、甲府市に生まれる。
一八九二	小林一三、「山梨日日新聞」に「練絲痕」を発表。
一八九一	文芸雑誌「北斗」創刊。
一八九二	甲府の新聞「甲陽新報」創刊。
一八九三	樋口一葉、春日野しか子の筆名で「甲陽新報」に「経くぐえ」を連載。
一八九四	村岡花子、甲府市に生まれる。
一八九五	奥石守郷主宰の短歌雑誌「えびかづら」創刊。樋口一葉、「たけくらべ」を「文学界」に連載開

一八九六	始。樋口一葉、「太陽」に「ゆく雲」を発表。
一八九七	樋口一葉、「文芸倶楽部」に「にこりえ」を発表。
一八九六	田山花袋『笛吹川』刊行。
一八九七	樋口一葉、歿(24歳)。
一八九七	文芸雑誌「峡中文壇」創刊。
一八九七	木々高太郎、甲府市に生まれる。
一八九九	◇この年、文芸雑誌「すみれ草紙」創刊。
一九〇〇	青柳瑞穂、市川三郷町に生まれる。
一九〇〇	相田隆太郎、北杜市明野町に生まれる。
一九〇〇	石原文雄、市川三郷町に生まれる。
一九〇〇	堀内柳南、谷村(現都留市)で正岡子規の流れを汲む新派の俳句会「白雉会」を興す。
一九〇一	佐野通正、「峡中文学」を創刊。
一九〇一	大島正健、山梨県立尋常中学校(現甲府一高)校長に就任。(一九一四年まで)
一九〇二	◇この年、秋山秋紅蓼、堀内柳南の手ほどきで「ホトトギス」などに投句を始める。
一九〇二	正岡子規の門人、新免一五坊、この年より富士吉田市、都留市に住む。
一九〇三	白雉会の柳南、一五坊ら、甲府市で山梨文学大会を開催。
一九〇三	中村星湖、上京。早稲田大学予科に入学、翌年英文科に進む。
一九〇四	中央線(八王子〜甲府間)開通祝賀式。
一九〇四	山本周五郎、大月市初狩町に生まれる。
一九〇四	歌人の神奈桃村、青梅会を創設。
一九〇四	前田晃、早稲田大学哲学及び英文科を卒業し、隆文館に入社。
一九〇四	俳句雑誌「白雉」創刊。
一九〇五	伊藤左千夫、甲州に入り青梅会の岡千里・日原無限らと会す。
一九〇五	◇この年、三井甲之、東京帝大国文科入学。根岸短歌会に入り伊藤左千夫の指導のもと「馬酔木」に短歌・評論を発表。また、飯田蛇笏は京北中学校に転入学。「校友会雑誌」に詩や俳句を発表。
一九〇五	篠原春雨、新川柳の結社「久良岐社」甲府支部を設立。
一九〇五	中里介山、「火鞭」創刊号に「笛吹川」を発表。
一九〇六	◇この年、飯田蛇笏、早稲田大学に入学。高田蝶衣らの「早稲田吟社」に参加。
一九〇六	中村星湖、「新小説」の懸賞に応募した「盲巡禮」が一等に当選。
一九〇六	前田晃、坪内逍遙の推挙で博文館に入社。三月創

刊の「文章世界」の編集をしながら、翻訳・評論等を発表。
 「俳諧草紙」創刊。
 熊王徳平、富士川町青柳町に生まれる。
 中村星湖、「少年行」が「早稲田文学」懸賞一等に当選し、翌月同紙に発表。金尾文淵堂より単行本化。
 中村星湖、早稲田大学卒業後、抱月の世話で、「早稲田文学」の記者となり大正八年まで勤務。
 萩原頼平、渋谷俊ら「甲陽文学」を創刊。
 野尻抱影、甲府中学に英語教師として着任、五年間滞任する。
 県下で大水害。
 飯田蛇笏、「国民俳壇」への投句を始める。
 三井甲之、「アカネ」創刊。
 山田多賀市、長野県に生まれる。
 「甲陽文芸」創刊。
 飯田蛇笏、高浜虚子の「俳諧散心」に参加。
 岩野泡鳴、「新小説」に前年夏、塩山温泉で執筆した「耽溺」を発表。
 前田暁と徳永寿美子、結婚。
 土橋治重、山梨市に生まれる。
 芥川龍之介、槍ヶ岳登山に向かう途中、中央線で山梨を通る。
 小尾十三、北杜市須玉町に生まれる。
 ◇この年、飯田蛇笏帰郷。
 若山牧水、飯田蛇笏を訪問する。
 荻原井泉水「層雲」を創刊。秋山秋紅、初期より参加。
 ◇この年、岡千里が晴耕会を、日原無限が松尾短歌会を発足。
 檀一雄、都留市に生まれる。
 芥川龍之介、富士裾野を散策。
 甲府吟社白星会（白雛会の後身）とカフ、吟社で、瑞泉寺に河東碧梧桐、荻原井泉水を招いて新俳句会を開催。飯田蛇笏は碧梧桐に初めて出会った。
 前田暁、博文館を辞す。
 浅川伯教、朝鮮公立小学校訓導として渡韓。
 中里介山、「都新聞」に「大菩薩峠」の連載始める。
 深沢七郎、笛吹市石和町に生まれる。
 村岡花子、東洋英和女学校高等科卒業、山梨英和女学校の英語教師となる。
 浅川巧、渡韓。
 望月冷果、文学雑誌「美と創造」を創刊。

飯田蛇笏「芋の露連山影を正しうす」の句が、「ホトトギス」雑誌欄で巻頭となる。
 山崎方代、甲府市右左口に生まれる。
 「キララ」創刊。二号より飯田蛇笏が俳句欄の選を担当。
 前田暁、読売新聞社に入社。
 高浜虚子、原石鼎ら「ホトトギス」の人々、飯田蛇笏を訪れ、富士川での舟下りを楽しむ。
 保阪嘉内、盛岡高等農林学校に進学し、宮沢賢治と出会う。
 「ホトトギス」に三月の甲州吟行が特集される。
 中村星湖「ボウライ夫人」(フローベール著)刊行。
 前田暁「陥穽」(コンクール兄弟著)刊行。
 篠原春雨、柳詒「新宝暦」を創刊。
 飯田蛇笏、高浜虚子と増富温泉に赴く。
 飯田蛇笏、「キララ」主宰を宣言。
 飯田蛇笏、「キララ」を「雲母」と改める。
 ◇この年、中村星湖、「文章世界」選者を務める。
 田山花袋、紀行文集「温泉めぐり」(博文館刊)で甲州の地を多く描く。
 窪田空穂、前田暁と長野県高遠に旅行、途中山梨を訪れる。
 飯田蛇笏「雲母句集」刊行。
 ◇この年、村岡花子上京。教文館で婦人・子供向けの本の編集に携わる。
 飯田龍太、笛吹市境川町に生まれる。
 徳永寿美子、成蹊学園の学園誌から依頼され、「薔薇の踊り子」執筆。以後寄稿。
 この年、雨宮生紀、飯島有垣ら詩歌誌「聖杯」創刊。
 徳永寿美子「薔薇の踊り子」(アルス)刊行。
 三井甲之ら、松島村で反社会主義講演会。
 ◇この年、大和久雄、上野頼三郎ら総合誌「あじさる」創刊。
 天龍山慈雲寺(甲州市塩山)に樋口一葉の文学碑建碑。前日に馬場孤蝶、戸川秋骨、半井桃水らを招いて甲府で文芸講演会が開かれる。
 米澤理蔵、米澤順子、米倉寿仁ら、詩歌誌「明眸」創刊。
 ◇この年、杉原邦太郎ら「若人」創刊。
 芥川龍之介、峡北夏期大学講師として清光寺を訪れる。
 井伏鱒二、震災直後、中央線経由で広島へ帰郷。甲府駅で愛国婦人会の慰問を受ける。

「山梨日日新聞」紙上でサンデー文壇始まる。
 柳宗悦が小宮山清三宅で木喰仏に出会う。十一月には木喰五行研究会を創設、研究誌「木喰上人の研究」を刊行。
 望月百合子「タイニス」刊。
 ◇この年、土橋治重、県立日川中学校を退学し、移民した父親を頼って渡米。
 中村星湖「山梨日日新聞」の文芸欄小説選者になる。
 山本剛、上野頼三郎、藤巻宜城ら「映象」創刊。
 「山梨日日新聞」サンデー文壇寄稿家のつどいで山梨文芸会結成。会名は投票の中から三井甲之が選択。
 杉原邦太郎、中村稔ら「原始時代」創刊。
 中村星湖、川合仁、望月百合子、野口二郎ら山人会を結成。
 石原初太郎「富士山の自然界」刊行。
 「峡中日報」紙上で月曜思潮学芸欄始まる。
 ◇この年、内田夜詩郎(義広)、中室員重ら「蘭の香」創刊。
 甲府市青年会館で近代詩芸術協会主催により詩作品展覧会開催。生田春月、花世ら特別出品。
 杉原邦太郎、内田義広ら「山脈」(二号より「虹」に改題)創刊。
 山本周五郎、「文藝春秋」に「須磨寺附近」発表。
 大村主計、杉原邦太郎、山口啓一ら総合誌「郷土」創刊。
 中村星湖、吉江喬松、加藤武雄ら農民文芸会を結成。
 金子文子、栃木警務所内で自殺。
 山中共古「甲斐の落葉」刊行。
 ◇この年から昭和十二年まで、前田暁、「山梨日日新聞」の文芸欄「創作」選を担当。
 芥川龍之介、自殺(35歳)。
 農民文芸会、「農民」創刊。相田隆太郎「農民文学論」、中村星湖「明月(戯曲)」、石原文雄「贅沢病」を掲載。
 ◇この年、第二次「山脈」創刊。伊藤生更、アララギに入会し斎藤茂吉の選を受ける。
 中村美穂、歌誌「みづがき」創刊。
 秋山喜久三、杉原董三ら「緑」創刊。
 ◇この年、飯野真澄、アララギに入会、土屋文明の選を受ける。
 山梨無産者芸術連盟発足。
 川合仁、「新聞文芸社」を創立。社員第一号は川

崎長太郎。
 田中冬二、第一詩集『青い夜道』刊行。
 ◇この年、許山茂隆「国民文学」に入会、松村英一に師事。
 雲母発行所を飯田蛇笏宅（山廬）に移す。
 中室員重、鈴木久夫、小野十三郎ら第三次「山脈」創刊。
 今井達夫らの勧めで、山本周五郎、荏原郡馬込村（現大田区）に転居。
 中村星湖、小島鳥水、西條八十と、甲州車窓十景、十名所を選ぶべく見て回る。
 「海囚」創刊。中室員重、山口啓一、杉原邦太郎、上野頼三郎らが参加。
 飯田蛇笏、第一句集『山廬集』を雲母社より刊行。
 相田隆太郎、『テクノクラシー』（新潮文庫）刊行。
 畑野温、米倉寿仁、宮田梅夫ら「カリブド」創刊。
 斎藤薫、福田一郎、小島実ら「青空」創刊。
 与謝野寛・与謝野晶子、甲州の友人や中込受の勧めで勝沼・昇仙峡・増穂などを訪ねる。渋谷俊・波瑠子、茂手木みさをらと交遊。
 米倉寿仁、宮田梅夫、曾根崎保太郎ら「豹」創刊。
 杉原邦太郎、上野頼三郎、中室員重、内田義広ら「詩と批評」創刊。
 野沢一、『木葉童子詩経』刊行。
 鳴山草平、『サンデー毎日』の第十四回「大衆文芸」の佳作に「明星峠」が入選。
 木々高太郎、海野十三の勧めで探偵小説を書き始め、「新青年」に「網膜脈視症」を発表。
 芥川賞・直木賞制定。
 伊藤生更主幹の歌誌「美知思波」創刊。
 小林実ら「映中日報」への投稿者たち、「映中文学」創刊。
 木々高太郎、「新青年」に「人生の阿呆」を連載開始（五月まで）。
 田中冬二、西山温泉、奈良田を探訪。
 木々高太郎、海野十三、小栗虫太郎と「シユピ

オ」創刊。
 木々高太郎、主に「人生の阿呆」で第四回直木賞受賞。
 中大路佳郷・千代子夫妻、歌誌「須曾乃」を創刊。
 井伏鱒二、御坂峠の天下茶屋に滞在。
 太宰治、御坂峠の天下茶屋に井伏鱒二を訪ねる。
 小川正子、小説「小島の春」を発表。
 太宰治、東京の井伏鱒二宅で石原美知子と結婚。甲府に新居を持つ。
 太宰治、「文体」に「富嶽百景」を連載開始（三月まで）。
 山田多賀市、「槐」に「耕土」を連載開始。
 山田多賀市、中村鬼十郎らにより山梨文芸界結成。
 鳴山草平、「新青年」に「極楽剣法」掲載（第九回直木賞候補）。
 太宰治、短編集『愛と美について』（竹村書房）刊行。
 太宰治、短編集『女性徒』（砂子屋書房）刊行。
 木々高太郎、雑誌「条件反射」創刊。
 多賀市、『耕土』（大観堂）刊行。
 山内一史・石原文雄ら「中部文学」創刊。同号掲載の熊王徳平の「いろは歌留多」が芥川賞候補となる。
 四月結成の富士五湖地方文化協会が「五湖文化」を創刊。中村星湖、編集に当たる。
 高浜虚子、山中湖畔に山荘を建て、地元の人々と句会。新蕎麦会と命名され、以後柏木白雨らは指導を受ける。
 山梨詩人会発足。「山梨詩人」創刊。
 石原文雄、「中部文学」に「断崖の村」を発表。芥川賞候補となる。
 与謝野晶子、上野原の依水荘に転地療養（九月まで）。
 石原文雄『太陽樹』（文昭社）刊行。翌年の新潮文芸賞候補となる。
 井伏鱒二、甲府東洋館に滞在中、陸軍徴用の知らせが来たことを知る。
 「山梨日日新聞」学芸欄が消え、翌年文化・家庭欄となる。
 太宰治、湯村温泉に滞在して「正義と微笑」を起筆。
 熊王徳平『いろは歌留多』（第一芸文社）刊行。
 谷崎潤一郎、河口湖畔のホテルに滞在し、このときの情景を後に「細雪」に描く。

太宰治、甲府石原家、湯村温泉に滞在し「右大臣実朝」を完成させる。
 小川正子、歿（41歳）。
 山本周五郎、第一七回直木賞に『小説日本婦道記』が推されるが辞退。
 中村鬼十郎『傾斜地の村』（アジア青年社）刊行。農民文学賞候補となる。
 日本青年詩人連盟、中部文学社、山梨詩人会主催「山崎精神昂揚文芸大会」開催。
 小尾十三、京城帝大系の「国民文学」に「登攀」を発表。
 中里介山、歿（59歳）。
 八木義徳、『劉広福』で第一九回芥川賞受賞。
 小尾十三、「登攀」で第一九回芥川賞受賞。
 井伏鱒二、甲府市に疎開（翌年七月まで）。出版企業整備のなか、「中部文学」は芸術部門担当を指名され存続。全国で十一誌のみ残る。
 ◇この年、金子光晴、山中湖畔に疎開（四六年まで）。
 小尾十三『雑巾先生』（満州文芸春秋社）刊行。「雲母」休刊。
 甲府空襲。
 終戦。
 ◇終戦直前、鈴木青処ら山梨・長野の俳人による笛吹会結成。高浜虚子の指導を受ける。
 多賀市、川手秀一ら「文化山梨」創刊。
 「雲母」復刊（発行所を世田谷の石原舟月宅に移す）。
 篠原春雨、歿（65歳）。
 青木辰雄、歌誌「山梨歌人」を発行。
 「ホトトギス」六〇〇号記念俳句大会が下部（現身延町）で開かれ、高浜虚子来峡。
 石原文雄・石井計記ら、第二次「中部文学」創刊。石原は「お千代の寝床」を発表。
 ◇この年、中沢紫雲、二代目春雨を襲名し、中沢春雨となる。
 菊島隆三、東宝脚本部に入る。
 「緑園」創刊。
 ◇この年、木々高太郎原作「三面鏡の恐怖」が映画化（大映）、また、この頃江戸川乱歩と探偵小説論争。
 「詩人群」創刊。
 太宰治、玉川上水にて入水（39歳）。
 山崎方代、山形義雄らと「工人」を創刊、山梨支部を右左口（現甲府市）の柿島秀男宅におく。
 ◇この年、富安風生、富士吉田の俳句会の指導に

一九四九 招かれ、以後北麓に親しむ。
相田隆太郎『農民文学の諸問題』(甲陽書房)刊行。

一九四九 菊島隆三、フリーの脚本家となる。黒澤明監督『野良犬』(黒沢明と共同脚本)でデビュー。
「裸子」創刊。

一九五〇 ◇この年、山崎方代、「泥の会」結成に参加。
「中央山脈」創刊。

一九五〇 「未踏」創刊。
「雲母」発行所を飯田蛇笏宅に戻す。

一九五一 檀一雄、『長恨歌』『真説石川五右衛門』で第二回直木賞受賞。
「青葉」創刊。

一九五一 多賀市、「農民文学」創刊。
木々高太郎、「山梨日日新聞」に「雲と詩のあの頃」を連載開始。

一九五二 村岡花子、『赤毛のアン』(三笠書房)刊行。
鳴山草平、『きんぴら先生青春記』(講談社)刊行。

一九五三 井伏鱒二・石坂洋次郎・舟橋聖一らによる戦後初の文芸講演会、甲府の県会議事堂で開かれる。
土橋治重、詩集『花』(日本未来派発行所)刊行。

一九五三 石原文雄、山梨文化協会を結成、「文化人」創刊。

一九五三 三井甲之、歿(69歳)。
『篠原春雨集』(篠原春雨集刊行会)刊行。
御坂峠に太宰文学碑建つ。

一九五四 ◇秋山秋紅、この年「早春」創刊。
「研」創刊。

一九五四 林真理子、山梨市で生まれる。
鈴木孝・許山茂隆ら歌誌「樹海」を創刊。

一九五四 山本周五郎、「日本経済新聞」に「樞ノ木は残った」連載開始。
飯田龍太「百戸の谿」(書林新甲鳥 昭和俳句叢書)刊行。

一九五五 「甲府派」創刊。
李良枝、西桂町で生まれる。

一九五五 山崎方代、第一歌集『方代』刊行。
「紙人形」創刊。

一九五六 保坂和志、富士川町に生まれる。
深沢七郎、「楢山節考」で第一回中央公論新人賞を受賞。

一九五七 熊王徳平、「作家」に「山峡町議選誌」を発表。
直木賞候補になる。

一九五八 藤巻宜城・遠藤仁市ら文芸誌「中央線」を創刊。
深沢七郎『笛吹川』(中央公論社)刊行。

一九五八 飯田蛇笏、飯田龍太、深沢七郎、小林富司夫が山慮で座談会、「雲母」七月号に「楢山山麓の一夜」として掲載された。

一九五九 深沢七郎の「笛吹川」について「群像」創作合評上で平野謙と花田清輝が論争。以後、江藤淳や本多秋吾らを加え「笛吹市論争」となる。

一九五九 小林實、「天使誕生」で第一三回講談倶楽部賞を受賞。
山本周五郎「青へか物語」(文藝春秋新社)刊行。

一九六〇 深沢七郎『風流夢譚』を「中央公論」に発表。
◇この年、秋山秋紅『層雲』の編集と選を担当。

一九六一 前田鬼、歿(82歳)。
飯田蛇笏、歿(77歳)。

一九六二 甲府舞鶴城跡に飯田蛇笏文学碑建つ(九二年に芸術の森公園に移転)。
備仲玉太郎、石井計記ら第四次「中部文学」を復刊。

一九六四 菊島隆三、黒澤明監督「赤ひげ」に参加。
新田次郎「歴史読本」に「武田信玄」連載開始。

一九六五 ◇深沢七郎、この年埼玉県蕨浦町にラブミー農場を開く。
秋山秋紅、歿(81歳)。

一九六六 飯田蛇笏『椿花集』(角川書店)刊行。
山本周五郎、歿(63歳)。

一九六七 村岡花子、歿(75歳)。
飯田龍太、第四句集『忘音』で読売文学賞を受賞。

一九六八 富安風生『富士百句』刊行。
武田泰淳、「中央公論」に「富士」連載開始。

一九六八 木々高太郎、歿(72歳)。
徳永寿美子、歿(81歳)。

一九六九 石原文雄、歿(71歳)。
◇深沢七郎、この年今川焼屋「夢屋」を開業。

一九七〇 中村星湖、歿(90歳)。
山崎方代『めし』により「短歌」第一回愛読者賞作品部門受賞。

一九七〇 檀一雄、歿(63歳)。
八木義徳、『風祭』で読売文学賞受賞。

一九七四 武田泰淳、歿(64歳)。

一九七九 小尾十三、歿(69歳)。
田中冬二、歿(85歳)。

一九八〇 深沢七郎、「みちのくの人形たち」で谷崎潤一郎賞を受賞。
辻邦生、「新潮」に「銀杏散りやまず」連載開始。

一九八二 山梨ふるさと文庫(岩崎正吾代表)創設。
第一回県立文学館構想策定話会。

一九八三 山崎方代、歿(70歳)。
林真理子、「京都まで」最終便に間に合えばで第九回直木賞を受賞。

一九八五 相田隆太郎、歿(87歳)。
深沢七郎、歿(73歳)。

一九八七 山人会が、中村星湖賞、前田鬼賞を制定。
李良枝『由照』により第一〇〇回芥川賞を受賞。

一九八八 山梨県立文学館開館。
中村鬼十郎、歿(78歳)。

一九八九 山田多賀市、歿(82歳)。
熊王徳平、歿(85歳)。

一九九〇 「やまなし文学賞」制定。
李良枝、歿(37歳)。

一九九一 「雲母」終刊(九〇〇号)。
◇この年の秋から翌年の春にかけて、近藤芳美が山梨で計六日間の吟行。九六年に『甲斐路百首』として刊行。

一九九二 俳句雑誌「白露」創刊。
土橋治重、歿(84歳)。

一九九三 井伏鱒二、歿(95歳)。
保坂和志「この人の闘」で第一三回芥川賞を受賞。

一九九五 河口湖畔に谷崎潤一郎文学碑が建てられる。
山梨文芸協会発足(清水昭三会長)。

一九九六 保坂和志『季節の記憶』で谷崎潤一郎賞を受賞。
津島佑子『火の鳥―山猿記』(講談社)刊行。

一九九七 谷崎潤一郎賞、野間文芸賞を受賞。
辻邦生、歿(73歳)。

一九九八 八木義徳、歿(88歳)。
望月百合子、歿(一一〇歳)。

一九九九 北杜市高根町に浅川伯教・巧資料館設立。
飯田龍太、歿(八六歳)。

二〇〇一 葦崎市藤井町に「保坂嘉内 宮沢賢治 花園農村の碑」建立。

二〇〇七